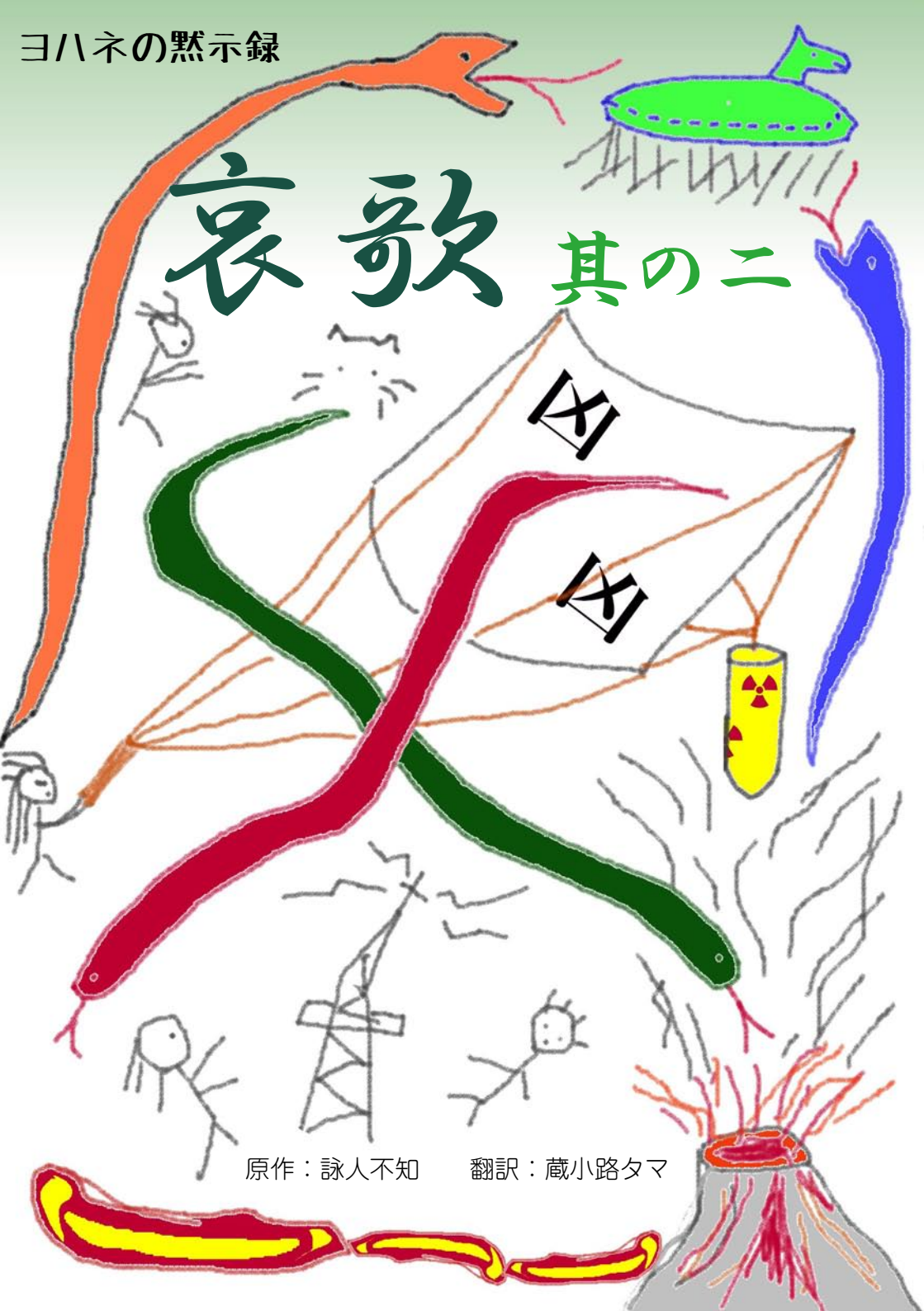


# 哀歌 其の二



原作：詠人不知 翻訳：蔵小路タマ



ハイ、世田谷ネコのタマだよ。

カナンに軍隊ができて、しかもアジテーターなんかいない自然発生の民主的挙国一致軍隊で、神様のほうが反体制になっちゃいそう。近々、治安維持法違反か何かでパクられるかもしれない（なんてことないか）。神様はいえ、もっと重要な何かを知ってるらしくて戦争どころじゃないみたい。

そもそも混迷・暴走する世界で、カナンだけが無事安泰っていうのが甘すぎるんだ。しかもネコのマリアの内閣は積極的無策主義っていうか、ただタレットで世界を見るだけ。唯一、サルディスカッションでPAを引き受けたのが政治的な行動だっていうから、この先もあんまり期待できない。神様はいつ「重要な決定」を下すんだろう。ヨハネに頼んだ「この世の終わりの物語」っていうのがちょっと気になる。

イエスは「アンナ」と聞いただけで、まだクラクラするらしい。ま、そのくらい純情じゃないとマジな宗教なんかできないんだろうけど。だけとさあ、これから起きる戦争は人間文化vs動物文化でしょ？ イエスの立場が苦しくならなきゃいいけど。どっちも神様に任せるしかないか。なお、原典の線文字B文書はネーデルラント連邦共和国のネコペディアで読めます。

んじゃ、どーぞ。

蔵小路タマ

## 明かされる秘密

進化という収斂なのか、あるいは宿命か、ただの偶然かもしれないが、理由は大した問題ではない。どうしてここまで似通うんだろう。もっと違った方向に変化してもよさそうなのに。裏世界を眺めながら神様は溜息をついた。

ただひとつ、こっちの世界と違うところは、多分ネコ型神様がいなかった分だけ、すべてにおいて節操がまったく感じられないことだ。まるつきり野放図に人間の都合だけで変化し、破滅への道を驕進している。こっちには俺がいて少しは良かったのかもしれない。

裏世界にも『神』という概念はある。無論それは人間がでっち上げたもので、こっちの世界でエルサレム派が言う神と酷似していた。逆らっちゃいけないのだ。神の名において人々は裁かれ、神の法によって殺される。そして、無益な戦争に勝ったものが時として神の子を名乗った。いずれにしても、ロクなものじゃあない、と神様は見ていた。

あっちの情報を封鎖したのは、こんなものをカナンの動物に見せたら大騒ぎになること必至だからだ。大体、裏世界なんて、数学上の都合で出来ただけで、バミューダトライアングルにさえ近付かなければ未来永劫こっちとは無関係なはずだった。ところが今、もしかすると関係アリかもしれないのだ。関係があるなら公開しなくちゃいけない。

裏世界の地理は、こっちとおおむね同じだ。人間の分布、動物の活動範囲もほぼ同じ。ただ、地殻の活動は少し違うようで、カナンに当たる場所のアラファト山は火を噴く火山になっている。ホテル・シオンは見当たらず、周辺にネコもいなかった。

ワシ型偵察機が送って来たデータを毎日見ていた神様は、裏世界の変化はこっちの世界の『早回し版』だと気付いた。もしかすると時間経過がこっちとは違うのかもしれない。偵察機を送り込まれたとき、裏世界で蒸気機関が発明され、実用化されたところだった。石炭がせつせと掘られ、空は煤煙でかすんだ。陸には鉄道、海には大型の汽船が行き交った。次にガソリンエンジンが開発されて、今度は石油が掘り出された。電気も発見された。なんにでも使え

て便利なようだが、所詮は石炭や石油を燃して作る  
しかなく、化石燃料は枯渇寸前だ。

地上の資源はすべて消費し尽くされていた。森の  
木々は伐採されて砂漠が広がり、さらに砂漠化が進  
みつつあった。その横には鉱山や油田の廃墟が大き  
な穴になって残っていた。

海も完全に支配されていた。人間が食べる魚だけ  
が生存を許されて、人間によって養殖されていた。  
その他の不要な生き物はいつの間にか絶滅し、忘れ  
去られていた。例外としてイルカとクジラだけは『高  
等生物』だというノスタルジーと『かわいい』とい  
う情緒だけで保護されている。牛だつて豚だつて高  
等生物でかわいいと思うのだが。

一見、人間がより便利に、より豊かに生きるため  
の必然的な変化のように思える。すべては人間のた  
めだ、と。でもそれにしては、とんでもなく大きな  
矛盾があるではないか。人間つて、誰のことだ？  
ほとんどの人間は、世の中には決定的な矛盾など無  
く、自分は人間だと、疑うことなく思っている。実  
はそれ自体、自分で好んでだまし絵の中に落ち込ん  
だ証拠なのだ。

蓄えられる。まあね、それでいいと思うならいいん  
だけど。

しかしそんな社会構造も、人間の生活がもつ『豊  
か』になるとワラワラと崩れ始めた。原子力が無限  
のエネルギーを生み、ロボットが産業のすべてを担  
い始めたことで、人間の労働の価値が大きく下がっ  
た。最初からロクな仕事が無かった棄民層のように、  
中間層や富裕層も仕事を失い、収入を失った。人間  
に期待されるのは労働や生産ではなく、ただ消費す  
ることだけになって行った。

社会の生産性は最高になった。最高とは、つまり  
は頭打ちということだ。新しい何かを生み出そうと  
しても、ロボットや電子計算機に勝てるわけがない。  
人々は目標をなくし、ただ食って生きるだけになっ  
たしまった。

ひとつだけ妙にアクティヴなことがある。どこか  
の誰かから年に四回、携帯電話の新型が発表される  
のだ。機能はほとんど変わらず、デザインだけが派  
手になるだけだが、人々はどんなに無理をしてで  
も新型を買った。というのは、常に新型を持ってい  
ることが中間層以上のステイタスだからだ。旧型し

ガソリンエンジンによって自動車ができたころ、  
空気が急速に悪くなった見返りとして、人々の生活  
は見かけ上良くなった。週に六日間必死に働けば自  
分の家を買えた。暖かい衣服も手に入るようになった。  
町の食べ物屋で買い食いもできた。そして、毎  
月の高額返済に耐えるなら最新式の自動車も買える  
ようになった。たしかにそれまでの便所も満足に無  
いような生活に比べれば大きな進歩だ。進歩を享受  
した人々は、自分たちを『中間層』だと感じた。そ  
して、世界人類の主体は中間層であるとさえ信じた。

神様は人間の愚かさに目を覆うばかりだ。中間層  
とは、ネコの言えば、自分で獲った獲物を目の前  
で横取りされても気にしない、悲しいまでに従順に  
調教された連中のことでしかない。ネズミを獲った  
ネコには、そのネズミを全部食べる権利がある。好  
んで放棄する馬鹿がどこにいる？ シツポの先だけ  
食べて、あとは誰かに渡してしまう。受け取った人  
間は、今度は耳の先だけ食べて誰かに渡す。最終的  
には、ネズミはほとんど手付かずのまま、全然知ら  
ない誰かの胃袋に入る。人間が働けば働くだけ、最  
後に食べる誰かの倉庫にネズミの干物が山になって

か持っていなければ棄民か奴隷の証拠だ。

五年も経ったとき、新型の売り上げが目に見えて  
減り始めた。携帯電話機の値段はそれほど高くない。  
しかし、最低でも二年使い続けるという契約になっ  
ていて、途中解約すると強盗でも取るのをためらう  
ような莫大な金額が請求される。中間層以上であり  
たい人々は、年に四回の解約金を、借金してでも支  
払う必要があった。払えなければ、その後一生の間、  
携帯電話を持てなくなる。そうなれば奴隷以下だ。  
いっそ自殺したほうがいいと思う人もたくさんいた  
し、多くが実行した。

世界に残っていた資産は携帯電話によって収奪さ  
れ、十年目には新型も出なくなった。つまり、もは  
や中間層も富裕層もほぼ消滅したということだ。

裏世界の富はどこに行ったのだろう？

神様はワシ型偵察機に裏世界経済界のデータ通信  
傍受を命じ、裏世界のカネの流れを追った。データ  
はもちろん暗号化され、巧妙に偽装されていたが、  
最終的には四軒の民家にたどり着いた。空撮写真に  
よると、四軒とも少し大きいだけの普通の民家だ。  
それぞれ家族が暮らしていて、今では希少になった

中間層のように見える。神様は偵察機に、これら四つの家族の身元を調べるように言いつけた。

データ通信傍受の収獲はもうひとつあった。反体制派の秘密活動を見つけたのだ。反体制というより非体制と呼ぶほうが適切かもしれない。無政府主義が政府という権力存在に対するアンチテーゼだとすれば、この集団は政府も体制も富も権力も、そして世界そのものの価値まで無視していた。神様はこのような思想に出会ったことがなかった。こいつらは、少なくとも甘っちょろい体制内の反体制派ではない。強いて共通点を見つけるなら、イエスの説教に共感した民衆に似ている。彼らに完全な絶望と諦めが加わり、究極の閉塞感を与えればこうなるのかもしれない。彼らは自嘲的に、自らを『凶器の会』と呼んでいた。

凶器の会は表向き、いろんな機械を自分で作って楽しむ集団を装っている。いや、装っているのではなく、本当にそうなのかもしれない。ロボットが作れば五分で完成するような機械を、自分の手で半年もかけて作っている。楽器の美しい音色をブタの声に変えるという、まったく世の中の役に立たないも

のを作るのが楽しいらしい。

そのメンバーの一人が使用済み核燃料を手に入れた。どこかの最終処分場から掘り出したのだ。部屋に置くとストーブ代わりになって便利だが、他に使い途はないだろうか、と考えた。世界中のメンバーと無駄話をするうちに、うまく精製して起爆装置を付ければ爆弾になるとわかった。すぐに工作に取り掛かって半年足らずで完成させてしまった。

「こんなもんで、いくらか役に立つかな？」神様がヨハネに尋ねた。

「とんでもない話だなあ。善悪の範囲を超えてる。崩壊社会の必然の究極みたいな気がする」

「そうなんだよ。俺ももはや止め立てするつもりはなくなった。あの爆弾が全部を変えるね」

「やつぱりどこかに落とすの？」

「そりゃ、作ったからには試さなきゃ。凶器の会では罫に吊ってアラファト山の火口に落として、地下深くで爆発させる計画らしい」

「あつちのアラファト山は活火山だよね」

「だから面白がってるんだ」

## アダムとイブ

「おい、今度も騙されてるんじゃないか？」ヨセフことアダムが言った。「イザヤ開発の奴ら、図面や完成予想図ばかり持ってきて、進み具合は全然教えないだろ。工事なんか何もやってないのどこがうか？」

「今のイザヤは先代と違うよ。ちゃんと契約書も土地の登記証もあるし」本当は少し怪しんでいたが、マリアことイブはそう答えるしかない。

「契約書とか登記証はただの紙切れだ。この目でしかと見届けないことにや、おれには何も信じられないな。イザヤ開発だって、建物は大きいけど、正直かどうかわかったもんじゃない。まともな不動産屋なら現地見学会とか内覧会とかするだろう」

「あんたねえ、マンシヨン買うんじゃないんだから内覧会はないと思うけど。それにあたしだって馬鹿じゃないんだから、一度カナンに連れて行って何度も言ってるんだ」

「何度だよ」

「もう百五十回は言ったね」

「おまえ、それでも気付かないの？こりゃ詐欺だぜ。一千万タラント取り上げばあだ。ウヤムヤで誤魔化されて、一銭も戻ってこないぞ」

「そう言われると少しだけ不安になってきた。どうすればいいんだろ」

「そうさなあ、イザヤ土地開発を相手にしたって暖簾に腕押し、いつそカナンに行ってみるしかないな。行って、『マリアとヨセフの土地』っていう看板でも立ててこよう。悪い支那人が入り込んで饅頭屋でも始める前に」

「支那人ってなにさ」

「知らないのか？最近じゃエルサレム派よりコスイ連中だ。誰のものかハッキリしない土地や権利があると、全部自分のもんだってアピールして、最後に、なし崩しに分捕っちゃう。今じゃ月の土地まで支那人のものになってるらしいぜ」

「おお、やだよ。そんな奴らと争うのは御免だね。なにしろあたしたちは清く正しい人間だから。それはそうと、カナンに行くのはいいけど、どうやって川を渡るのさ。ものすごく広いって言うじゃない。

大きな船が要るよ。船頭だって雇わなきゃ」

「任せとけ。だてに三文博打やってるわけじゃねえ。チンチロリンでローマ海軍の司令官に二万三千タラント貸しがあるんだよ」

「えっ、あんたが勝ってるの？」

「もちろんさ。勝ってるから貸しなんだ。負けてりゃ借りだろ」

「へーえ、世の中には下には下がいるもんだねえ。あんたが世界最弱のギャンブラーだと思ってたのに。あんたに負けるなんて奇特な人だ」

「大きなお世話だよ。船さえ手に入れば、おれは昔漁師だったから、川なんか簡単に渡ってみせらあ」

そう、誰が言ったか知らないけれど、イエスが生まれるだいぶ前からヨハネは遠洋航海に出ていたの  
で、だからイエスは神の子だ、という間尺に合った話もある。

翌日の朝、ヨハネとマリア夫婦は「ちよつと死海温泉に行きますの」と隣近所に挨拶して、金銀散りばめた馬車で出かけていった。

## ヨハネの黙示録

とうちゃんはこうして僕だけにあんなものすごい秘密を教えたんだろう。この世の終わりの物語を書くのに要るからだろうけど、どうして僕なの？ 選ばれてあることの恍惚と不安と二つ我にあり。

ヨハネはいろいろ迷った末、神様から聞いたことのダイジェストをカインとアベルに話した。二匹はビックリし、話したヨハネ自身ももう一度驚いた。大体、世界がもうひとつあるなんて、どの動物が想像できるだろう。神様の話には出てこなかったけれど、やっぱりネコもいるのかな。向こうのネコは有袋類で、頭にはツノが生えてたりして、などと三匹は一気に盛り上がった。もう少し早く知ってたら探検に行くんだったな。爆弾投下寸前とわかって行くネコは、まずいない。でも行ってみる価値はあると思うよ、等々。そうだ、今は馬鹿話してるときじゃないんだっけ。

できればイエスにも相談したかった。イエスはアンナと会ったのが恥ずかしらしく、出かける準備を

したまま、まだ隣でうじうじしていた。アンナのとど頭がいつばいなんだ。どっちのアンナかな？ アラビアに消えたアンナか、ノアの娘のアンナか。多分だけど、イエスの中ではいっしょくたになつて  
ると思う。純愛とはそういうものだ。特に初恋なら。だからイエスには何も話さないことにした。今は。

ふたつの世界が構造的にどう関係しているかで、世界の終わりは違うものになる。とりあえずこっちの世界にとつてはそうだ。その辺のこと、とうちゃんも詳しくは知らないだろうな。しょうがないから、ヨハネはあっちの世界の物語だけを書くことにした。あっちの出来事がこっちにどのくらい影響するかは、起きてみなくちゃわからない。じゃ、書いてみようか。

物語の最初は地響きだ。世界の樹の根っこで何かが壊れたような、不気味な地鳴りと振動が世界を包む。生き物はすべてその場にひれ伏し、大地の叫びが静まるのを待つ。しかし大地の震えはいっこうに収まらず、かえって激しくなるばかりだ。

次は火だ。地平線に赤い火が見え、徐々に天空いっぱいに広がる。燃え盛る紅蓮の炎に、狂気の黄色と淫らな紫が混じり、いつしか天は怒りの輝きで満たされる。生き物はひれ伏したまま天を見上げ、逃れようのない大きな災いが襲いかかったのを知る。神を求める声も聞こえるが、偽神は答えの兆しさえ見せない。天はさらに多くの色彩で満たされ、恐ろしさを通り越し、さながら天国の入口のように見える。天の炎は熱風を生み、熱風は山を越え、海を渡って四方から生き物に吹き付ける。熱風は岩をも溶かし、吹き渡る音は、死の天使の鳴り止まぬ七本のラッパのようだ。

七つの原発が倒壊し、炉心溶融からメルトダウンに至る。核燃料は地の底に達してマグマと混ざり合い、さらに大きな爆発を惹き起こす。マグマと核燃料は、今降りてきた地中の道を逆流し、赤い上にも真っ赤に輝く龍となって中空に躍り出、地上のすべてをなめ尽くし焼き尽くす。七つの原発から放たれた七匹の龍は、生き残った生物を捜し求めて、なおも地上を飛び交わす。

即座に七つの大都市が壊滅した。七つの商社、七

地上には何もなくなった。虚偽の存在しかあり得ないのなら、いつそ何も無いほうが美しい。地上に平和が戻った。

いいじゃん、すごくいい！ヨハネはおのれの文才に酔った。これならとうちゃんも褒めてくれる。ヨハネはきちんと清書して、急いでホテル・シオンに走った。

「うん、なかなかよく書けてる。なるほどなあ、こういうことになるのか」神様は右手でヒゲをこすりながら言った。「龍がアミダで決めるかどうかは別として、煩惱で上昇できないなんて、お前たちじゃないと書けないね。これ、採用する」

「採用ですか、嬉しいな。だけど何に採用？」

「決まってるだろ、裏世界の終わりのシナリオ」

「ええっ、ウソでしょ。ぼくはそんなつもりで書いたんじゃないです。ただ、世界の終わりはどんなかなって」

「だから、これでいいんだよ。世界の終わりっていつでもシナリオがなくなっちゃね。行き当たりばったりで

つの銀行も消滅した。人間が築き上げた虚構の繁栄は一瞬にして無に帰した。

うん、なかなか名調子だね。ヨハネは読み返してニヤツと笑った。このあとどうしようか。そうだ、窮地を尻目に脱出して助かろうという不遜な輩もいるに違いない。とうちゃんが言ってた、他ネコが獲ったネズミを横取りする連中だ。

地上に動くものの影が見えなくなったとき、どこからか馬の形の宇宙船が舞い上がる。これまで一切の罪を自覚せず、行いを省みることのなかった不遜な者たち、青血族の船だ。初めに白、続いて赤、黒、青ざめた緑の四隻が地上を離れた。自ら作った虚栄の文明を見捨て、外宇宙へ逃げ去るつもりなのだ。怒り狂ったように噴火する火山の噴煙を抜けて四隻の船は天高く上昇し、見えなくなる寸前、故障でもしたかのように下降を始める。煩惱のあまりの重さに船が耐えられなかったのだ。七匹の龍は我れ先にと争って船を追いつ、七匹全部には行き渡らないからアミダで誰が食べるかを決め、そして四匹が食った。

終わらせたら無責任だろ」

「そんなあ、いやですよ。そんな重要なことを神様が書かないで子どもに書かせるなんて、もっと無責任だ」

「いいじゃないの。お前は俺の子だよ。神様の子だ。書く資格は充分にある。誰も文句は言わないって」  
「文句とか、そうじゃなくて、とうちゃんが自分で書けばよかったのに」

「うん、試みたことには試みた。書こうと努力はしたが、どうもなあ、火山の下の方草むらにいるキリギリスのことを考えたら、かわいそうでかわいそうで、とても書けなかった」

「で、ぼくに振ったってわけ」

「うん」

「かあちゃんに言いつけてやる」

「待て、それだけは勘弁しろ。そうだ、天竺教をカナン」の国教にしてやろう。お前は唐僧正だ」

「今更いいよ」

「そうか、じゃあやめた。あんな、この中でひとつ気になるのがある。青血族ってなんだ？」

「ブルーブラッドね。それ、とうちゃんの話にあっ

た、世界中の財産を握ってる四件の家のこと。いざとなったら尻に帆かけて逃げる用意に、宇宙船くらい持ってると思って」

「たしかにそうだな。ワシ型偵察機に見つけさせよう」

神様はヨハネの作文を、座布団の後ろにあるネズミ入らずにしまった。

そのころ裏世界では、狂気の会のメンバーが爆弾の起爆装置について議論していた。風から切り離れた後、どのタイミングで、どんな方法で爆発させるか。候補は二種類ある。火口内の落下速度をアテカンで決めて、単純なタイマーで起爆する方法と、それじゃ新味がないから、地圧を検出して、一定以上になったらオン、という方法。両者の長所と短所を比較検討したが結論は出ない。

それじゃあ、というので、両方の起爆回路の設計を始めたところで、あるメンバーが気付いた。起爆回路には電源が要る。多分リチウムイオン電池を使うだろう。リチウムイオン電池が、火口の中みたいな高温の環境で働くだろうか？ そんな所に持って

行ったら爆発しない？ それって起爆装置にならない？

結局、爆弾の周囲に、手元にあるありったけの電池を貼り付ければ用は足りるというのが結論になった。

爆弾は完成した。

「ヨハネが裏世界の終わり方を書いたから、それで行くことにしたよ」神様はテレパシーに言った。

「知ってます。あの作文は妥当なところでしょう」

「それでさあ、もしそういうことになったら、こっちの世界でも何かヘンなことが起きるんじゃないかな」

「もちろん起きます。時限の位相が違うだけで、基本的には同一空間ですから」

「どの程度のこと？ 地面が少し揺れるとか、妙な音が聞こえるとか、そのくらいだよな？」

「さあ、わかりません。なにしろ太陽フレア並みの巨大エネルギーが放出されるんです。計算もシミュレーションもできないので見当も付かない。地震だけで済めば超ラッキーですよ。つられてこっちの世

界まで壊滅しても不思議じゃない」

「それ困る。すぐ困る。そういう肝心なことを、どうして前もって言ってくれないの。うん、ヨハネを呼ぼう。呼んで、シナリオの採用は取り消しって言おう」

「わかってないですね。いったん神様が『採用』って決めたものは取り消せません。前にも何度かあったでしょう。勝手に何か口走って、あとであわてたこと」

「うん、かすかに憶えてるけど、ねえ、どうしても無理？ 銀河系長老連合に頼んでも？」

「ダメ、無理、不可能です。そんなことより、いざとなった場合に、こっちの世界をどう救うか考えるべきじゃないでしょうか。もし救う気があるならです」

「救うねえ。ちよつと一考を要するなあ」

「一考でも後光でも、まだ多少の時間はありますから、ゆっくり考えてください」

国家存亡の一大事に、ヒントもくれないで『ゆっくり考えてください』なんて、ほんとにアテになら

ないやつだ。仕方がない、次は誰に相談しようかな。

マリアは騒ぐだけで解決策なんか思いつかないだろう。やっぱりイエスだろうか。いや、みんなで祈りましようなんて言って、俺に向かつて祈られても困る。ノアはどうだろう。大脱走の経験者だから逃げ方は心得ているに違いないが、今度ばかりは逃げ場所がない。動物たちに言えば、まずレミングが集団パニックで走り出して他の動物も続くだろうから、どうにも収拾がつかなくなる。だめだだめだ。ここは一人で名案をひねり出すしかない。苦手なんだよなあ、考えるの。

いつそのこと。世界を支える三頭の巨象に頼んで、ゆっくりでいいから別の場所に移動してもらおうか。それなら象の下にいる大亀に頼んだほうが早い。だけど彼らとはお友達じゃないもんなあ。初対面で頼んでも、いい顔はされないだろう。ああ、もうダメかもしれない。こんなに進退窮まったのは初めてだ。ほんとに人間でやつは面倒なことをしてくれる。自分たちの面倒くらい自分たちで見ろよ。俺たちを巻き添えにするな。

神様は考えていたら眠くなった。



タイガ、クレバス、ツンドラの三匹は裏世界のワシ型偵察機に張り付いてモニターしていた。タイガは凶器の会を監視し、凧が揚がるようならすぐに警報を出す。クレバスとツンドラは民家風の四軒の家を見張り、おかしい動きがないか、家の中はどうなっているのかを調べていた。他にも見張る対象はあったが、神様が「そんなの、もうどうでもいい」と言ったので、どうでもいいことにした。

ツンドラが「赤外線と素粒子ビームで何かヒットしたよ」と言った。民家の地下に巨大な構造物らしいものが見え、どうやら地下数十メートルまで達しているようだ。クレバスはすぐに他の三軒にも同じような構造物があるのを突き止めた。さらに驚くことに、世界各地に点在している民家の間は、大深度地下のトンネルで相互につながっていた。

「これは何だろう。何百キロもある秘密トンネルみたいだ。時間があればトンネルの詳しい調査もできるけど」ツンドラはもっと調べたそう。

「やめとけよ。四軒が秘密の一味だってわかっただけではない。今さら手出しもできないし」クレバスが

悔しそうに言った。

四軒に人間の出入りはまったくない。多分外からは空き家のように見えるだろう。しかし地下には多数の生体反応があり、忙しく動き回っていた。

「もうすぐ凧ができるよ。畳むとスリッケースに入るサイズで、広げたら五十メートル四方になる。こんな凧、一度でいいから揚げてみたいな」タイガは凧の図面をコピーしてファイルにセーブした。

「凧作りの場所から、あつちの世界のアラファト山まで、どのくらいで行ける？」クレバスが訊いた。「そうだなあ、高速船なら一日、船に乗るまで一日半。合わせて三日つてところだろう」地図を見てタイガが答えた。

神様はその日、これまでの情報封鎖を解いて、裏世界の映像を無制限に公開した。これまでどうして封鎖していたのかには触れず、クロに言つて『裏世界の歴史ダイジェスト』を作らせ、併せて放映した。あまりに衝撃が強すぎたためか、番組を見た動物たちは揃って沈黙してしまった。

## 親子の再会

「ちよつとあんた、方向は合ってるんだろうね」ローマ海軍から強引に横流しさせた上陸用舟艇でマリアが言った。もう丸二日は川を渡っているのに、対岸はいっこうに見えてこない。

「方向はこんなもんだらう。おれが漁師をしていたのは海でここは川だから、少し勘が狂ってるんだ」「へえ、水が塩辛いかどうかで船の扱いが変わるんだ。知らなかったね。そんじゃ水が甘かったらどうなるのさ」

「うるさいなあ素人のくせに。そんならおれと代わってみるか？ 真つ直ぐ進むのだって難しいんだぜ」

「だからあたしは船頭を雇おうって言ったんだ」「それが隠れ支那人だったらどうする。真つ先に上陸されて『支那人の土地だ！』って宣言されたら困るじゃないか。カナンはまだ誰にも実効支配されていないから、叫んだやつものになっちゃう」

「雇おうと思つてた船頭はタバコは吸わないって言つてた。だから支那人じゃないよ」

「禁煙中かもしれないだろ。隠れて吸われて船火事でも起こされた日にゃ」

「ちよつとおまえさん、山みたいなのが見えるよ。向こう岸の山じゃないかね？」

「ありゃ、ほんとだ。着いたぜカナンに」

早期警戒任務に当たっていたトンビから、「国籍未確認の船舶一隻、こっちに向かつて」と報告があり、サルのコマンドは全動物にデフコン1を発令した。オオスズメバチの大群が川岸を警戒飛行し、象とキリンは一斉に配備に着いた。カラスは川沿いの手近な木に移つて、いつでも急降下攻撃できる態勢をとつた。沿岸警備隊のカバとワニは船を遠巻きに囲んで、命令があればいつでも突撃する準備を終えていた。

ノアの家でアンナと遊んでいたイエスは森が騒がしいのに気付く、馬のエドに乗つて川岸に来たが、多数の動物が走り回っているだけで何が起きているのかわからなかった。ようやく伝令のサルをつかまえて話を聞くと、「これは演習ではない。繰り返し、これは演習ではない」と前置きしてから事情を説明



してくれた。

人間が乗っているかもしれない不審船が来るという。もし人間が上陸した場合、まずスズメバチが襲いかかって刺しまくり、逃げるところを象が踏み潰す。それでも逃げ切った人間にはカラスが空からサルが地上から攻撃を加えて皆殺しにする作戦だと誇らしげに言った。

「ちよつと待つてよ。警告も与えず、相手の目的も聞かずに攻撃するのは、あまりに野蛮ですよ」

イエスが言うときサルは答えた。

「野蛮かどうか、そういった情緒的判断は軍隊ではいたしません」

「国際法上も問題がある」

「法律については軍の法務部に正副二通の書面に割り印を押して問い合わせてください」サルはお辞儀をして行ってしまった。もう軍隊馬鹿が発生したようだ。イエスは顔見知りの象に頼んで、川沿いの最前列に連れて行ってもらい、一番クビの長いキリンに頼んで頭の上に乗せてもらった。船が見えた。それもローマの軍船のようだ。

ローマ軍の船なら動物たちが大騒ぎするのも仕方

「はい、僕はイエスといっています。この土地に住んでいます。あなたは？」

船の上でマリアとヨセフがどれほど驚いたことか。二人は互いの顔を見つめ、思わず抱き合った。

「イエスだよ。イエスだ。うちの子だ」

「そうだよ、おまえさん。やつぱり生きてたんだ」

涙声でマリアが叫んだ。

「イエス、あたしの息子のイエス。来たよ、母さんだよ」

今度はイエスが驚いた。まぎれもなく母の声が聞こえたからだ。すると、あの無教養な声は父のヨセフということになる。

「母さん。僕です、イエスです。ああ、奇跡だ。これも神の思召し。神様、感謝いたします」

「俺、なんか感謝されることしたかな」ホテル・シオンで神様が呟いた。まあよかったじゃないか。イエスの葛藤が、これでひとつ消える。でもなあ、この時期、性格が良いとはいえない人間が二人も力ナシに来るなんて、面倒が三倍になった気がする。

ない。だけどたった一隻とは。先遣隊だろうか。それともただ迷って来ただけか。ハイキングではなさそうだが、友好的とは限らない。などと考えているうちに、船はどんどん近付いて来た。

「おい、人間が乗っているなら答えてくださいーい！」イエスは声を限りに叫んだ。すると船上に男の影が現れて叫び返して来た。

「おう、人間様に乗ってるぞ。悪いか」

「悪くはないですが、上陸しないでください。死にますよ」

「うるせえぞ。てめえの土地を見に行くんだ。邪魔立てするな。そっちこそ死ぬぞ」

自分の土地？ カナンに土地を買ったのは、マリア、つまり母しくないはず。今叫んでいる粗野な男は誰だろう。

「上陸する前に、まず氏名を名乗ってください。正式許可を出せるかもしれません」

「許可だと、ちよこざいな。お前こそ名乗りやがれ。それが礼儀だろうが」

言われてみればたしかにそうだ。人に名前を訊くなら、自分がまず名乗らなければ。

イエスはキリンから降りて川に飛び込み、泳いで船に這い上がった。両親はイエスを抱きしめ、三人は再会の喜びを同時にしゃべり始めた。船は川岸の三十センチ手前で停止していた。

サルの司令部では総攻撃をかけるかどうかで参謀たちが議論していた。まだ上陸していないから侵略されたわけではなく、攻撃する理由がないという一派と、専守防衛でも、明白な脅威の前では事前防衛も止むを得ないという一派に分かれていた。議論は平行線で、仕方がないので伝令を出してイエスに意見を聞くことにした。

「あのお、お取り込み中申し訳ないですが、司令部が攻撃してもいいかどうか訊いてこい」と伝令サルが揉み手して言った。

「ダメに決まってるでしょう。この人たちは敵ではありません。僕の両親です。全軍撤退を求めます」イエスは珍しくサルを睨み付けた。

「そうかもしれませんが、肉親だからといって良い人とは言いませんし」

「ですから、僕は良い人なんて言ってない。神の子

は正直です」そして振り返り、森に向かって叫んだ。「カナン軍の諸君、たしかに人間が来ました。善良な人かどうかわかりません。でも僕の両親です。両親を殺されるなら、いつそ自分が死んだほうがいい。攻撃するならまず僕を。振り上げたこぶしの落とし所がなければ僕の頭上に。それから、お騒がせした償いに、このローマ製の上陸用舟艇をカナン水軍に寄贈します。これで撤退してもらえませんか？」

動物たちはざわめき、どこからともなく「やめたやめた、帰ろうぜ」と声が上がって、イタチとタヌキがぞろぞろと森に戻り始めた。スズメバチの群れも高度を上げ、空のどこかに消えてしまった。象とキリンが来て、「またいつでも乗せるよ」「今度はアンナもいっしょにね」と言って草原に帰って行った。「もう本隊に復帰していいですよね」伝令サルは敬礼して参謀本部に走った。

「せっかく手に入れた船なのに、おれに無断で誰かにやっちゃまうなんて、どういう息子だ」ヨセフは怒っている。

「そうよ、船がなきゃ帰れないじゃない。また雲で

行くのかねえ」マリアも不安そうだ。

「まあまあ、ゆっくり話をしましょう。いろんなことが起きているんです。ところで雲ってなんですか？」

「あつ、クモ？ そうだよクモの糸」

しまった、この子はあたしたちの正体を知らないんだっけ。

「うん、大グモね。伝説だよ。ここには巨大なクモがいて、その吐いた糸に乗ればどこにでも行けるって。そんな話、知らない？」ヨセフもどうにか誤魔化そうとした。

「いえ、知りません。大グモもいないですし。でも大丈夫ですよ。父さんと母さんは、これからずっとここにいることになると思います」

イエスは二人を寺町通りの庵に案内した。いきなりホテル・シオンに連れて行けばネコのマリアとひと悶着ありそうな気がしたからだ。まず、世界のこと、カナンのことを話し、ここで生活している自分を理解してもらうのが先と考えたのだ。

これは折伏みたいなものだなあ、とイエスは思っ

た。まったく違う価値観の人に、思いもよらなかった価値観や倫理観を理解してもらうのだ。しかもそれは親で、親に説教するなど地獄に落ちそうな気がする。だけどやっぱり知ってもらわないと困る。イエスは一生懸命に話した。

最初につまずいたのはカネについてだった。カナンにカネはない。だから余計な争いは起きず。意味なく威張る奴も出てこない。動物たちは自分が生きるだけの富を取り、それ以上は不要だから、富を溜め込むためのカネは要らない。食い物を溜め込んでいるのは、カナンでは蟻と蜂くらいだろう。

「じゃ、女中を雇っても給料は払わなくていいんだね」マリアが訊いた。

「酒場もタダだってことだ」ヨセフは喜んだ。

イエスはどう説明していいかわからなかった。まして、カナンには『生きるため』のものしかなく、だから満ち足りている、ということ、どう話せばいいのだろう。一歩間違えばポルポトになっちゃう。両親が意外と難敵なのを知った。

カナンは神様を象徴とした独立国家であることも話した。人間から見れば、人間以外の動物が国家な

ど持てるわけがないと思うかもしれないけれど、ここには総理大臣もいるし最近できた軍隊もある。領土があつて国民がいて政府がある。国として批准されるかどうかは、相手側の政治的な都合だけ。そんな話もした。しかし国家については、両親はまったく興味がないうだった。

一度に全部話すのはとても難しい。でも、裏世界の状態と、この世の最後が迫っているかもしれない実態もわかったもらわなければならない。イエスはタブレットのストーリーミング配信でクロのドキュメンタリーを見せた。

「恐ろしいね。爆弾魔を止める方法がないなんて。すぐベツレヘムに帰って、家や劇場を叩き売って金貨に換えといったほうがいいんじゃない？」という二人の反応に、イエスは頭を抱えた。

## 悔い改めよ

神様は多忙だった。軍事行動があつてますます戦争機運が高まつている一方、終末論が横行し、寺町通りは魂の救済を求める動物で溢れている。地面の穴を巣にしている動物と昆虫は、昼夜兼行で穴をさらに深く掘り下げている。情報部からは逐一報告が入り、すでにカウントダウン状態に入っている。こんな状態で平和に情眼をむさぼるのは無理だ。とはいえ、神様はいつも以上に眠っていた。

「俺が慌てたらまずいだろう」という理由だが、本当のところはわからない。

情報部から、凶器の会メンバーがもうすぐ高速艇に乗ると報告が来た。あと丸一日、ということだ。二十四時間で世界を救えるものだろうか？絶対に不可能だな。

両親が眠っている隙に、イエスは神様を訪ねた。

「助けてください。話せばわかるというのは建前論です。生活感覚が百八十度違うと、いくら言っても

正しい理解には行き着きません。生活感覚というのは、これまでの生き方から染み付いたもので、壊すのはバベルの塔を倒すより難しい。神様、助けて」よくわからないが、何故か必死のイエスを見て、これは容易ならんことだと直感した。

「何について言っているんだ？ ムササビと宗教論争でもしたの？」

「いいえ、両親です。ヨセフとマリア。ムササビならこんなに困りません」

そうか、あの二人か。俺もやられたんだからイエスじゃ太刀打ちできないだろう。また追放するのが最善の策だろうが、今は危ない。追い出して死にでもされたら恨まれるもんな。

「わかった。イエス君、方法というのは常に複数あるものだ。ひとつがダメそうなら、努力したり深追いつたりせずに別の道を選ぶといい。それがラクチンに生きる奥義だよ」

「別の道つてあるんですか？」

「うん、受付を代わろう。ここに連れて来たらどうだろうね。三分でカタを付けてあげる」と言つても、神様に具体案はなかった。まあどうにかなるさ。

神様が動いた。クロにメールしたのだ。三十分後にネット放送の全チャンネルで告知を流せ。今夜、アラファト山で俺が演説するよ、つて。できれば来てほしいけど、来られない動物はストリーミングで見ると、とも。

「あのさあ、馬の水飲み桶、どこかにやった？」マリアがきよろきよろしながら入ってきた。「エドが、水が飲みたいってさ」

「ああ、ハナボチがカメラの三脚代わりに持つて行った」

「黙って持ち出しちゃ迷惑だよ。ホテルの備品でしょ。あいつ、ちゃんと返すだろうね」

「知らないよ。今日明日は忙しいから」

「忙しいと返さなくてもいいんだ。ふーん」

「連れて来ましたよ」目が覚めたばかりで朦朧としている両親をイエスが引っ張ってきた。

これはこれは、紛うことなきアダムとイブだ。ネコのマリアの策略と恫喝で作らされた人間第一号と第二号。ここで逢ったが百年目と云いたいのを我慢

して、神様は「ああ、よく来たね」と招き入れた。

ネコのマリアは神様の後ろでシッポを最大限に太くしながら「ビッチ、来やがった」と呟いた。

アダムとイブは、すでに秘密をイエスに明かしたのでだろうか。秘密にもいろいろあるが、二人が神様に作られたという一件だ。それによって対応を変えなければ。

「さあさあ、遠くからご苦労様。お疲れは取れましたか？」神様はソファアに招いた。

「あつ、このネコ知ってる。小汚い模様の神様ネコ」マリアことイブが小声で言った。

「いや、知ってるわけじゃないはずだぜ。ネコなんかどれも似てるから、近所のネコと間違えてるんだ。なにしろここに来たのは初めてだし。はっはっは」ヨセフことアダムはあわてて言いくるめようとした。

そうか、まだなんだな。神様は状況を理解した。

「あたしゃこんな人間知らないけど、色が黒いのは見分けがつかないから、もしかして会ったことあるかもしれない。本当に初対面？」ネコのマリアが意地悪く言う。

一座の緊張に、理由がわからないイエスは戸惑っ

た。なにしろ両親と神様一族がテンパッているのだ。  
「あの、紹介します。こちらが父のヨセフと母のマリア。それで、こちらは神様とネコのマリアさん。後ろで寝てるのが雲の運転手のサルです」

「あらためてカナンにようこそ。歓迎するよ」神様はしらばっくれて言った。「ヨセフさんにマリアさん、どこからいらしたのかな。バビロンとか」神様もかなり嫌味だ。

「いや、バビロンなど行ったこともねえ。ベツレヘムから来たんだ」ヨハネことアダムが気色ばんで言った。

「なるほど。てつきりバビロン出身の方と思つてね。いや、出身地などどうでもいい。あなたがたはカナンで八人目と九人目の人間になる。定住する上での覚悟はおありですね？」

そんなこと訊くのはまだ早いよ、とイエスははらはらした。案の定アダムが、

「定住？ なんのこった？ とんでもねえ話だ。こんな文明果て尽くした山の中で暮らすなんて、ちとら、ぜひと御免こうむりやしよう。おいイエス、おれたちを帰さないつもりか？」と凄んでみせた。

かり昔に戻っていた。

「いいよいいよ、死んでやる。こんな美容院もない未開地であたしが暮らすなんて、死ぬより恥ずかしいよ。さあ殺せ」マリアことイブも負けてはいない。

「父さん母さん、少し落ち着いてください。これにはちゃんとした理由があるんです。ここから出て行けば必ず死ぬとはいいませんが、死ぬ確率は、いつもの一万倍以上あります。ものすごく危険です」あからさまに神様の側に立つと、かえって反発されると思いつつもイエスは説明しようとした。

「お前までクソネコに味方するのか。一体なんだつてんだよ。おれがベツレヘムに帰ると地でも裂けるか？ 天でも落ちてくるか？」

「それに極めて近い状況です。いいですか、いろいろ疑問はあるでしょうが、まず僕の説明を聞いてください。それと神様、どこか空き部屋をひとつ貸してください」イエスは父とサシで話を付けるつもりらしい。

「一階の奥が空いてるよ」ネコのマリアは便所の隣の部屋を教えた。

「あんたあ、もうカナンは見たし、息子にも会ったから、ベツレヘムに帰ろうよ。ローマの軍艦返してもらつてさあ」イブはこの場を逃げ出したいらしい。

神様はさつき三分で片を付けると言った。もう三分経ったけど、雰囲気は険悪になるばかり。これは失敗だったかな、とイエスは小さくなっていた。

「まあ落ち着いて。お帰りになりたいならすぐにも用意させます。船でも雲でもお好きな方法で。ただ、雲はこれから数時間予約が入っているの、少々待つてもらふことになるけどいいですか。おい、雲ザル、さっき言った用事を片付けておいで」神様が言うと、サルは「合点！」と一声残して雲を空中に浮かべた。

「ここカナンでは、来るもの拒まず、去るもの追わずが鉄則でね。まあ、これまでに去った動物はいないけど。帰るならあなたの方が第一号だ。ただねえ、今この世界情勢で帰るっていうのは、よほど命を無駄に捨てたいんだとお見受けするが」

「へんッ、脅し透かしは変わつてねえな。なににおお、帰れば命をなくすだど？ どういう口からそういう嘘八百が出てくるんだい」ヨセフことアダムは、すっ

「この期に及んで最悪の客が来たね。悪いことは重なるって言うが、あたしは納得する」ネコのマリアはエドの水飲み用の容器を、もう一度探した。

「そうかな。面倒がいっぺんで済むから、悪い事は重なったほうがいいよ」神様は寝転んでタブレットを眺めていた。

「どうやつてもシミュレーションできないの？」マリアが訊いた。

「うん、裏世界がどう壊れるかだって完全にはわからないんだ。だから、その影響がどのくらいかなんて、変数が多すぎて計算結果の信頼度は二パーセント程度にしかない、とソフトが言ってる」

「じゃあ、最悪のシナリオならどうなるの？」

「言うのか？ 消えるんだよ、一瞬で。地殻からマグマが噴出するピークと原発がエネルギーを放出するピークが重なれば、ほとんど超新星爆発だから、裏も表もなく、この世界は瞬時に消える」

「神様も消えるのかな」

「わかんないよ。神様と自然エネルギーのどっちが強いかなんて、まだ誰も実験していないだろうから。生き残ったとしても意味ないけど」

「じゃ、一番軽く済むシナリオは？」

「カナンでもすごく軽い地震くらいはあるだろうな。隕石爆弾のときより、ずっと小さい地震。もしかすると空気の揺らぎも感じるかもしれない。モワツとした感じ。それから、これは避けられないことだけど、バミューダトライアングルの通用口から放射性物質が漏れてくるだろう。空中に舞い上がれば偏西風に乗って世界中に散乱する。完全に消えるのに十万年くらいかかるだろうよ」

「軽くてそれ？ 放射能の影響は？」

「直ちに健康に影響するレベルではない、つていうのはたしかだ。いきなり白目をむいてひっくり返りはしないってことで、十年後にどうなるかはわからない」

「あーあ、どっちにしても安心できないね。どうしてネコが被害に遭わなきゃいけないのさ。金持ちの人間みたいに、これまでオイシイ思いなんかしてないよ。なのにジョーカーだけくれようっていうんだ。てめえのケツはてめえで拭きやがれクソ人間」

「俺も、そんなつもりじゃなかったんだけどなあ。少しは自制心や先見性を持たせたつもりなんだけ

ど、免罪したのが悪かったのかねえ」神様は少し凹んでいるようだ。

「自分を責めるのはおやめよ。責めたって事態は変わらないんだし。神様のせいじゃないよ」

マリアはちよつと優しく言って、神様の首の後ろを舐めてやった。

目をぎらつかせたアダムを先頭に、イエスとイブが奥から出てきた。

「ご心配かけました。細かいことはともかく、世界が壊滅の危機に瀕していることだけはわかったもらいました」とイエス。

「納得したわけじゃねえが、そんなに危ないなら様子を見ようってことになって、二三日はここにいてやる。世界がだめになったらずっといるぞ」アダムが腹立たしそうに言った。

「あたしもそうするよ。他に住むとこなきや、ここにいないからね」イブも同じだ。

二人の『居てやつてもいい』みたいな態度に神様はカチンときた。そして、ついに言った。

「二度だけ言うぞ。悔い改めよ」

## 山上の垂訓再び

今夜アラファト山で演説することはカナン中の動物と虫に一匹残らず知れ渡っていた。山上の垂訓以来の演説だから誰もが参加したが、足の遅い尺取虫などはすでに会場に向けて歩き始めていた。

さて、何をどういう順番で話そうか。前と同じで神様は迷った。話し手の誠意の問題として、紙を見て話すのだけはしたくない。プロンプターも無いから、全部憶えておかなきゃならない。だけど、憶えるのは無理だな。まあいいや。当たって砕けるだ。多少のいい間違いや順番の入れ替わりはしかない。気持ちを伝えることが一番大切だ。一生懸命やればどうにかなるだろう。神様はまた眠った。

PAからは、あろうことかキンブル音頭が流れていて、盆踊りと間違えたカモノハシが踊っていた。だって、これしか音楽ソースが無いんだもの、とハナポチ。この前の垂訓で余った花火も上がった。にぎやかなのは良いことだ。

「はい、総理大臣のマリアです。静粛に。静粛に。これから神様が話をするよ。大事な話だよ」

アラファト山の斜面から麓まで、隙間無く埋め尽くした動物たちが神様の登場を待っていた。

神様はいったんステージ中央に立ち、すぐに袖に引っ込んでしまった。オシッコだそうだ。数十万の動物が神様のオシッコが終わるのを待った。

次に神様はゆつくりと出直して、開口一番「待たせたね。砂はちゃんとかけたからね」と、まずは笑いを取った。

「みんな、来てくれてありがとう。この前、集まってもらってから何年経つか。いや、思い出せないくらいでいいんだ。その間に、大きな出来事が何もなかった証拠だもん。俺は特に役立つことはなかったし、総理大臣も忙しくはなかった」

「いいえ、結構忙しかった」マリアが野次った。

「まあ、どう思いかはネコそれぞれだ。そうだな、一番の大事事はタヌキの穴が浸水したことかもしれない。みんなで子タヌキを救出したよね。それと、チーターとジャッカルが獲物の取り分でモメたこともあったけど、誰も怪我しなかった。俺たちはまず

まずうまくやっていると思うよ。

今夜話したいのは主にふたつのことだ。まず人間がカナンを壊しに来るかどうか。それと裏世界のこと。実は両方とも根っこはひとつなんだけど、混乱するといけないから別の問題にしておこう。

人間がカナンを乗っ取ろうとしてる件だけど、俺の考えでは今すぐっていうことはないと思う。人間が欲どしいはみんな知ってるよね。カナンの開発に時間がかかればかかるほど、ゴチャつけばゴチャつくほどベンダサンは儲かる。だから、すぐに始めるとは思えない。

でも、やっぱり不安なのは俺だって同じ。みんなが軍隊作ったのも、ごく自然なことだ。人間が束になつて来るなら、こっちも束になつて追い返さなきゃならない。

実際に人間が攻めて来たら、カナンの軍隊で勝てるかどうか、正直言つてわかんない。でも、黙つて国を明け渡すなんて動物の沽券に関わるでしょ。そのときは戦つていいよ。そこで、言つときます。戦争では絶対に死ぬな。かすり傷は仕方ないけど、大怪我はするな。俺は神様だから、少しは魔法みたい

なものが使える。いざとなつたら精一杯カナンを守ります。手品とか奇術とかで」

動物たちから大歓声が上がった。やはり神様は味方だ。

「静かに、静粛に。まだ続きはたくさんあるよ」マリアが叫んだ。

「でもね、ひとつ勘違いしないでほしいのは、俺は人間を敵とは思つてないこと。人間だって俺が作った生き物だから、ミジンコと同じように人間も大切なんだ。特に、カナンに攻めてくるローマ軍の人は、一人一人は悪くない。悪くない人間と悪くない動物が戦う。まるで馬鹿みたいだろ。それが戦争。敵を憎らしいと思うのが普通みたいだけど、それって作られた憎しみでしかない。根拠なんてありゃしない。じゃ、何が悪いのかつて言えば、人間の欲が一人歩きしてることだと思う。いろんな人間の欲が集まつて、それがムードみたいになっちゃって、それがまた他の人間に乗り移る。どこかでムードを断ち切ればいいのに、誰もできないんだ。気の毒つて言えば気の毒だな」

「あのネコ、いいこと言うじゃないか」ヨセフことアダムが言つた。

「ほんとだね、小汚い分だけ頭はいいのかもしれない」マリアことイブが答えた。

「だからね、人間を憎むのは筋が違うのさ。それに、憎んだつて何も解決しない。逆に、仲良くすればいいことはたくさんある。ノアの家族やイエスと知り合つて、みんな楽しいだろ？」

また大歓声。

「人間がカナンを取りに来たら戦おう、つてみんな思つてるだろ。それしかない？ 本当にそれしか手はないの？ もしかしたら戦争せずに帰ってもらう方法があるかもしれない。今、俺には思い付かないけど、みんな、考えておくれよ」

会場がざわついた。ローマの兵隊に贈り物をしたら帰ってくれるだろうか。いや、そういうことではなくて……といった会話が飛び交つた。

「んじゃ、次の話に行こう。まずみんなに謝る。裏世界の情報を封鎖してたこと。監視カメラがあるのに、ネットには流さないでいた。どんなデータも全

部公開するつていうカナンのポリシーを俺自身が裏切つた。これは良くないことだ。だから謝るよ」

神様はピヨコンと頭を下げた。

「とはいえ、理由を話しくね。裏世界があるつて知つたのはずいぶん前で、物理学で遊んでいたときでね、面倒な理屈を省くと、とにかくこの世界と同じような世界がもうひとつあるつてわかつた。でも、覗いてみて驚いた。人間の本性丸出しの、どうにもこうにも救い難い状態なんだ。たとえば、そう、ハトの諸君、裏世界では君たちは食われるためにだけ飼われてる。ライオンやトラといった大型ネコの諸君、向こうじゃ獰猛だつていう理由で、動物園で見世物になつてる以外、全部殺されてる。もし生きてても走り回れる草原なんてない。イヌは？ ダニエル、君の仲間は食料になつてしまふか、それとも恐ろしい奇形に変形されてネズミみたいなチンクシャになつてる。あつ、ネズミたち、気を悪くした？ ネズミは、向こうじゃもつとひどくて、実験で殺されるのが専門の動物だよ。

いちいち言つてたらきりが無い。魚や虫も含めて、あらゆる動物が人間に管理されて、絶滅させら

れたり、異様に数を増やされたりしてる。そう、牛のチャーリーと同じことが全部の動物で起きてると思っいいい。そんなひどい状態を、みんなに見せられるか？ そんなのを見て平気な動物はいるか？

もし見せたら、みんなは人間を憎むだろう。こっちの世界の人間も大嫌いになるに決まってる。それは困るんだ。事実と違うからね。さっきも言っただけど、一人一人の人間はそんなに悪くない。悪いところって言えば、自分で考えて『こんな世の中、間違ってるよ』って言う勇氣も氣力も無いことだ。たまにはイエス君みたいに本当のことを言う人間も出てくる。でも、イエス君は処刑されちゃったよね。世の中から追っ払われたわけだ。で、ついには強いやつに従う人間ばかりになっちゃってる。これは裏世界もこっちの世界もまったく同じ。

裏世界では、人間はみんな奴隷なの。それもタチの悪い奴隷。自分が奴隷だって気付いてないんだから、目覚めようがない。何も変えられない。そんなのを憎んでどうする？

あんまりこの話をして意味がない。っていうのは、裏世界はもうすぐ壊滅するから。あと半日もな

いはずだよ。裏世界全部が吹っ飛ぶ。神様の俺にも止めようがないんだ」

「救うことは考えなかったの？」ウサギの子供が叫んだ。コウロギがコロコロ言っって「そうだよ、救えないの？」と同調した。

「悩んださ。向こうの人間にも罪が無いっていえば無いし、まして人間以外の動物にはまるっきり責任なんかない。とぼっちりで死ぬんだから、そりゃ、いろいろ考えた。」

ただ、裏世界全体を救うことは全然考えなかった。生きながらえさせたら、どうしようもない世界が今後もずっと続くことになる。俺には耐えられない。じゃあ、生き物だけを救う？ どうやって？ どこに逃がす？ ほら、現実には無理なんだ。でね、残酷なようにだけど、そもそも間違った世界なんだから、こらでいったん終わりにさせるしかないって覚悟した。しょうがないだろ？」

聴衆は沈黙した。沈黙はかなり続いた。

「まだ黙祷するのは早いよ」神様が言うのと、やつと少し笑い声が上がった。

「どうして裏世界が破滅するってわかる？ 証拠でもあるのかな」オオカミのボスが訊いた。

「うん、証拠もあるし、残念ながら破滅のシナリオもある。裏世界の偵察カメラのうち一台が追いかけてる凶器の会っという人たちがいるよね。あの人たちは火山に原爆を投げ込もうとしてる。もうすぐ爆弾投下の準備ができるよ。それが引き金になって、裏世界の全部の火山が噴火して、地震で原発も壊れて、地上が火だるま、放射能だらけになる」神様はシナリオを書いたのがヨハネだとは言わなかった。吊るし上げられたら可哀想だから。

「凶器の会っってなに？ どうして世界を壊すの？」オオムが尋ねた。

「世界を壊すつもりなんかないだろうよ。結果として壊すんだけど。俺は彼らと会ったことも話したこともない。でも、何となくわかる。言っとくけど彼らには政治的な背景や思想は全然ない。ただ面白そうだからやってるだけ。さっき裏世界の人間は奴隷だって言ったよね。奴隷だって気付かない奴隷。そ

んな社会で生まれて、天真爛漫に育って、特にやることもなくて、あとは年取って死ぬだけってわかったら、もう面白いことするしかないでしょ。良い悪いじゃないんだ。

金魚は、自分の周りに水があるのを意識してないと思う。もしかしたら知らないのかもしれない。金魚鉢の中は安全だから、そんなこと考えなくていいんだ。ある日、凶器の会っという金魚たちが爆弾を作って、面白そうだから金魚鉢を壊してみようって思った。ただそれだけのことだよ」

「おれたちの子孫の金魚はそんなに馬鹿じゃない」フナが怒った。

「あのなあ、たっぷりエサもらって、緊張感皆無の生活を何百世代も繰り返すと、どんな動物も馬鹿になる。フナに限った話じゃない。だから怒るな」

フナは納得しなかったが文句を言うのはやめた。「さあ、ここから俺たちカナンの動物に直接関わる話になる。裏世界は爆発的に終わるんだ。そう、文字通り大爆発でね。それがどれだけこっちの世界に飛び火するか、困ったことに見当がつかない。計



算上では、向こうとこっちは時限の位相が違うから、何が起きても関係ないってことになってる。次元の位相って、俺にはわかんないけど。

でも、計算上と実際とが違うのは誰にでもわかる。向こうの大爆発につられて、こっちで何が起きるか。もしかすると、そよ風が吹く程度かもしれない。そうならいいけどね。最悪なのは、こっちでも何かが爆発して一瞬で世界が消え去ることもあり得るんだ。まあ、この中間のどれかだと思うけど、こんな予想なら下駄の天気予報より意味ないな。

こっちの世界の人間にも罪はそんなにない。サマリヤ人もいるしね。もしも半端に世界が壊れるようなら、神様として救援物資を送ることも考えてる。これまで、世界の動きにはまったく介入しなかったけど、今度は助けなきゃならないかもしれない。これがプランBだ。

プランAっていうのは、こっちでは何も起きないか、起きても小さな地震くらいのときで、それなら神様は何もしない。一番ラクでいいや。

で、最悪の場合がプランC。どうにも手が付けられないくらいの大災害になった場合のことだよ。手

く。東と西は森林化した土地全部と、その先の砂漠をちよつとだけ。詳しいことは地図にしたいからネットで見ておくれ。これから半日、くれぐれも地図の外には出ないように。カナンに乗り遅れたら、次の船はもうないよ」

動物たちは急いでタブレットを取り出して地図を見た。「おれんちは大丈夫だ」「イルカの連中に知らせなきゃ」「旅に出たフンコロガシは戻って来てるかな」等々、アラファト山全体が動物の話し声で溢れた。

「しつもん！ カナンが動くとき、どのくらい揺れるんですか？」子どもを抱えたボノボの母さんが大声で言った。

「もつともな質問だね。大揺れしたら怖いよね。といて、まだ一度もやったことないので、どのくらい揺れるかはわかんない。なるべく揺らさないようにするけど、できれば何かにつかまってほしいな。揺れるとしても地上を離れる一瞬だと思う。その後は上に昇るだけだから揺れない」

「もひとつしつもん！ 今度はヒョウの父さんだっ

が付けられないんだから何もできない。それだけじゃなくて、多分カナンも危なくなるだろう。空気が汚れて息ができなくなるかもしれない。川や海に大波が来て大洪水になるかもしれない。一番怖いのは、最近世界のあちこちに人間が作った原子炉っていうパンドラの箱、こいつが吹き飛ぶと世界中に毒が撒き散らされて、知らないうちにみんな死んじゃうんだ。その毒には匂いも色もないから始末が悪い。逃げようがないからね。

プランA、B、Cのどれにするかは俺に任せてくれる？ みんなで話し合って決める時間はないと思うから」

「異議なし」「任せた」の声といっしょに、「Cならどうするの？」とカササギが叫ぶのも聴こえた。

「わかった。これから話すよ。簡単に言えば逃げるんだ。いや、みんなで駆け出すことはない。俺がカナンを地上から切り離して、安全な場所に動かす。動物たちみんながカナンに乗ったままで、地上の毒が届かない場所まで移動する。北側の川も半分だけ持つて行くし、南の海も鯨が住める程度は連れて行

た。「逃げるって、どこへですか？ もう決まってるんですか？」

「もちろん決まってる。空に上がってウロウロするのは嫌だろ？ 一直線に目的地まで行くつもりだ。お月様だよ。ウサギが決めたんじゃない、俺が決めた。地上から危険な放射能が上がってきてても、お月様なら裏側に隠られるし、カナンと月は大体同じ大きさだそうだから、すっぱり隠られる。逃げるにはいい場所だろ？」

さて、俺の話はこれで全部。何が起きてもカナンは安全。神様の保証付き。みんな家に帰って、いつもの通り過ごしてくれて大丈夫だ。これから何か起きたら、必ずネットで伝える。大切なお知らせのときには、ネットの全チャンネルに割り込むから、いつも通りゲームやメールしていいよ」

始まったときと同じように花火が上がった。PAからは、またキンブル音頭が流れ、ミーマキヤットダンスーズが七色の照明を浴びて踊り始めた。

## 雲ザルの黄昏

神様駐在所に戻ってくると、部屋の隅で雲ザルが膝を抱えてしょぼくれていた。

「やあ、ご苦労さん。大変だったね」神様は気軽に声をかけた。

「ええ、まあね。超特急で回ってきやしたぜ」サルは柱を指先で引っかけた。「大体想像通りでしたが、最後が一番キツかったすよ」

午前中、イエスと両親が来る前、神様は雲ザルに大仕事を頼んでいた。人間と動物たちへの警告。もうすぐ世界が大災害に襲われるから、できるだけ安全な場所に避難してほしい、そう伝えるようサルに頼んだ。せめて警告くらいしないと、神様も後々寝覚めが悪くなるだろうと考えたのだ。

仮に裏世界からの影響が少なく、大災害など起きなかったときには、ただの人騒がせなデマになるが、それならそれでいいと神様は思っていた。

空からも撒けるビラを数億枚作り、発行元を「カ

ナン国の神様」とした。サルはビラを雲に積み込み、神様といっしょに考えた周回ルートで宣伝飛行に出発した。

最初に訪れたのは天竺だ。サルは雲を降りてお寺を回った。坊さんたちにビラを渡して説明しても、誰一人驚かない。まったく取り乱さないので。

「ホントに全員死んじゃうんですよ」とサルがわめいても、「ああ、そうですか。わかりました」と坊さんは言い、手近な石に座って座禅を始めてしまった。

どうも調子が狂うなあ。サルは農村にも出かけてビラを配った。すると五歳くらいの男の子が来て、サルに小さなアメをくれて言った。「知らせてくださいありがとうございます」そして笑った。

サルは、この子は誤解してるんだと思い、「死んじゃうかもしれないけど、怖くないの?」と訊いた。子供は、「怖いよ、でもイヤじゃない。生きてるのが死ぬのに変わるだけだもん」と答えた。

恐ろしい国だ。この人間は生まれたときから悟ってる。サルはこの国を尊敬した。

次は支那の南海岸に行くつもりで地上を見ている

と、山の中に小さな国があった。予定にはないが、

とりあえず行ってみた。そこは杞という国で、住民はみんな神経質のようで、サルがビラを配ると、はたして大パニックが起きた。世界破滅のうわさは数分で国中に広がり、誰がどこで間違えたのか「空が落ちてくる」に変わっていた。人々は家畜を連れて山麓の洞穴に避難してしまった。まあいいや。誤解でも何でも、安全な場所に逃げ込んでくれれば。

南海岸では、ルーシで失敗したマオたちが性懲りもなく、また新しい社会システムの実験をしていた。

タオはマオの番頭さんのように立ち回っていた。可哀想なのはリンで、マオに楯突いたために反革命分子の烙印を押され、怖くなってルーシに逃げ帰る途中、乗っていた馬車が谷底に落ちて死んだという。

サルの撒いたビラは、一瞬のうちに全面否定された。これは地主勢力による破壊工作であり、世界が終わるなど科学的にありえない。このような心理戦には正しい思想をもって立ち向かい、我らの尊敬する指導者同志の決定に従おう。労働者独裁万歳。

あほらし。お前ら今死ぬか、生き残って後で苦し

むかだ。サルはさっさと南海岸を後にした。

支那の大陸を奥に入り、長安の都に着いた。ここ的一般民衆はサルにとって一番リーズナブルな反応を示した。怖がり、疑い、話し合い、逃げ出したのだ。ただ問題は政治を預かる者たちだった。学者を集めて真偽の判定を始めたものの、学者ごとに言うことが違い、ついには議論のための議論になった。この分じゃ結論が出るとしても一万年後だろう。サルは長安を飛び発った。

神様との打ち合わせにはなかったが、サルは気になったのでルーシにも行ってみた。農村地帯は見渡す限りの麦畑で、刈り取りの時期のようだ。サルは雲を降りて農民に話しかけ、ビラを見せた。ビラを呼んだ農民はとても嬉しそうだった。「これは本当かね?」農民が訊いた。「多分、この世は終わりになります」サルが答えると、農民は躍り上がって喜び、「これで楽になる」とみんなを呼び集めた。

農民が言うには、今年はメチャメチャ働いて、どうにか豊作にはなったけれど、こんなのは珍しい。

来年は今年以上に働いても大凶作になるかもしれない。もうこんな苦しい労働はイヤだ。愛想が尽きてる。世界中が死に絶えるなら、そんな素晴らしいことはないでしょう。

これまでの人間の反応を見て、サルは世界は狂っていると始めた。もっと純粹に怖がりたり悲しんだりできる人間はいないのだろうか。

エルサレムには最初から行きたくなかった。石をぶつけられると思ったからだ。でも神様は「誠意を持って話せば通じるさ」と気楽なことを言った。あるいはそうかもしれない。サルは雲を降り、人間にビラを手渡すことにしたのだが。

やっぱりだ。誠意より暴力のほうが強いのだ。数分も経たないうちにヒゲもじゃで黒ずくめ、シルクハットみたいなのを被った男たちが現れ、続いて労働者風でメロンパンみたいな帽子の連中も集まってきて、「この異教徒め」「カナンの神様だど？ 神はヤハウエだけだ」「人心を惑わす畜生野郎」と追いかけられた。

このまま永遠に続くと、人間たちは信じ切つて疑わない。繁栄と虚栄の区別もつかなくせに。

雲を南に向けてしばらく飛び、最後の目的地にやつて来た。一度だけ来たことがある場所だ。着地したのは広大なヒマワリ畑の真ん中。風景は以前と少しも変わっていない。イエスが歩いた道もそのまま残っている。サルはヒマワリの林をしばらく歩き、豪華な屋敷の前に出た。ここだな。どんな結果になるうとも、サルの面子にかけて最善を尽くそう。

じつと目を凝らすと二階のテラスに人影が見えた。赤ん坊を抱いた若い女性だ。サルは音もなくテラスに上がり、暗闇に身を潜めた。女性は赤ん坊に何か呟いている。

「いい子に育とうね。美人になるよ。早く大きくなつてね。母さんの大切な人の話を聞いてね」

アンナだ。どう声をかけるか迷ったが、自然体で行くしかない。

「もし、ご新造さん、奥さん、いやさ、アンナさん。神様の住むカナンから参りやしたサルめにございます。堅気衆の軒下をお騒がせいたしましたして申し訳ご

「そうじゃなくて、危ねえから知らせに来てやつたんだ」

「危ないだど？ たとえ世界が減んでも、神に選ばれし我が民族は無傷で生き残るわ。おおかたイエス一派の策謀だろう。みんなで成敗してくれる」

数十人に囲まれて、一時は網に絡め獲られてしまった。サルは必死で網を食い破り、雲を霞と逃げ出した。人間とは獐犢な生き物である。アリにだってもっとと理性はある。サルは腹立ち紛れに上空から大量の小便を撒き散らし、少しでもスッキリしたのだった。

次の訪問地はローマだ。無用な摩擦を避けるべく、法王庁の近くには行かないことにした。サルは雲の上から街の中とローマ政庁の庭にビラを撒いた。ビラの内容を真面目に受け取った人は一人もいないように、新しい広告だろう」「パプでもできるのかな」「いや、新刊書の告知だ」「何かのクーポン券だろう。集めようぜ」となって、一枚一ドラクマで売り買いされた。二時間後には三ドラクマになっていた。

「あーあ、知らねえよ」サルはあきれた。ローマは

ぜえませんが、ぜひとも話を聞いてやつておくんなせえ」

「どなた？」

アンナは陰に向かって小声で答えた。サルはゆつくり光の当たる場所に出た。

「雲サルと申しやす。アンナさんに折り入ってお知らせとお誘いを言い付かってめえりやした。まずはこれを」とビラを渡した。

「まあ、それはわざわざ」アンナはビラを丹念に読んだ。表情は変わらなかった。

「ついに、ですか」驚いている様子はまったくない。「いずれすべてが終わると覚悟しておりました。私の命か世界の寿命か、どちらかが」

「平気なんですかい？」

「いいえ、できれば避けたいとは思いますが。でも、定めなら」

「いえね、あつしが来たのは、もうひとつの道があるってことをお知らせするためなんです。どうでしょう、カナンに来ちゃあくれませんか。お子さんも連れて。カナンなら安全に生き延びられます。神様が守つてくださるんで。それにイエスさんもいます」

アンナは微笑んだ。

「イエスが？ お元気でしょうか？」

「ああ、ピンピンしてるね。食いもんが いいのか、ちょっと太ったけども」

「嬉しいお話、安心いたしました」

「だからね、お子さん連れでカナンに来ちゃあどうでしょう。神様もそう言ってますから」

「ありがとうございます。私のようなものが神様からお誘いいただけるなんて、お断りできることではございませんが、でも、だめです、行けません」

「また、どうしてでやす？」

「この子はマリヤ、一歳半です。長男のイエスは、もう十二になります。おサルさん、お子様は？」

「えっと、ヒマがなくてね。カミさんもいねえんで」

「そうですか。お子様をお持ちならおわかりになるのに。子どもたちは父親を愛しています。別れさせることなどとてもできません。そして、私は子どもたちを愛しています。手放すことはできません」

サルは一瞬考えた。

「わかりました。あつしにも足し算引き算くれえはできるんで。だけどアンナさん、世界が終わるのい

いことに立ち入ったことをお伺いしますが、アンナさんは旦那さんを愛していないのかね？ 三角形の残りの辺が知りてえと思つて。どうか気を悪くならんねえで」

「いいえ、構いません。世界が終わるのをいいことにお答えすれば、夫を愛しているかどうか、私にはわかりません。私が愛しているのはイエスだけです」

サルは切なくなつた。混乱もした。もつと強引に誘おうと思つたとき、アンナが言つた。

「でもね、間違えてはいけないのは、私が愛しているイエスは十五歳のイエスだということ。愛している私は十八歳。そう、普通なら思い出ですわね。遠い昔の。

私自身、とても悩みました。いつまで思い出に縛られているのだろうって。それがわかつたのです。何年か前、イエスが訪ねて来てくれました。あのとき全部わかつたのです。

思い出ではないのです。イエスの優しい目、暖かい手、柔らかない声。イエスを想うとき、いつでもそのままに感じます。イエスの息遣いも。イエスを想うとき、私はいつも十八歳なのです。いつもここに

イエスがいます。十五歳のイエスが、私のすぐそばに。それでも思い出でしょうか？」

「いや、あつしにやあそこまで好きになつた相手がいねえんで、肌身じゃわかりやせんが、言いなざるこたあ全部わかりやす。アンナさん、あんたあ幸せだ。そこまで思われてるイエスも幸せだ。ですがねえ、勘こいようだが神様の命令なんって言わせていただきやすが、そんなに好きなら、やつぱりイエスと一緒になつちやあいかでしよう」

「それはきつと無理。時間は様々ないたずらをします。私が愛していると心から言えるのは、十五歳のイエスです。きつとイエスも十八歳のアンナを待っているはずです。もし今、二人が再会したなら、お互いに誰を愛せばいいのでしょうか。私はもう十八歳ではありません」

「いいえ、多分二人はもう一度愛し合えると思います。今までよりもつと幸せになれるかもしれせん。でも、それは欲張りというものです。わかつてくださいますか？」

サルにはよくわかつた。そんな面倒なこと言わずにカナンに來いよ、とも言いたかつたが、そこまで

言える図太さは持ち合わせていなかった。

「残念でさあ。一世一代の残念でさあ。なんか、あつしまで大恋愛したような気分。イエスさんには黙つとくことにします。うまく言えそうもねえんで」

「ええ、そうしてくださるのが一番でしょう。おサルさん、来てくださつてありがとうございます。ご存知のように私は娼婦でした。いくらイエスを愛していても、その気持ちを打ち明ける相手などいませんでした。たとえ世界が破滅しよう、その前に心の底の真実をあなたにお話しできて、私はもう思い残すことはありません」

傾城は嘘をつくのも勤めのひとつ。所詮女郎の恋なんて、どなたにも信じていただけません。ですから私、これまで一度も口にしたことはありませんでした。この嘘ばかりはまことなり、と」

アンナは涼やかな視線を夜空に投げた。そこにイエスがいるかのように。

## プランC

ホテル・シオンの屋根裏、神様駐在所で、雲ザルの泣きはらした目が真っ赤だった。

「神様、どうして世の中はこんなにうまく行かないんですかい。もし、あつしが死んであの二人が結ばれるんなら、何回でも死んでやりませあ」

「その気持ち、嬉しいよ。だけど、お前が死んでもだめだろう。俺が死んでもね。うまく行かないのが普通なんだ。そういう風にできる」

「できるなんて、作ったのは神様でしょう」

「うん、誰でも自由に生き方を選べるように、無限に近い可能性を取り揃えた。選ぶのは自分の意思だよ。藁束からどの藁を抜いてもいい。でも当たりは少ししかない。少し意地悪だったかな」

「そうだ、意地悪だよ。自己批判してもらいてえな」

「この破壊騒動が収まったら公開自己批判でも何でもしよう。だがなあ、イエスに関して言えば、間違った藁を引いたのは一度きりだ。アンナがアラブに出发したとき、馬車に間に合わなかったことだけ」

ん親切でしたよ。水の神様にしてくださいたり、支那では美女に化けて幸せな結婚もしました」  
「それはよかった。しばらくゆっくりしていなさい。積もる話も聞きたいから」

「あつ、そうでした。ゆっくりはダメです。クロさんに言い付かって神様を呼びに来たんです。今すぐ情報部に行ってください。大急ぎで。爆弾がどうとか言っていました」

神様とサルはヘビを置いて外に飛び出し、雲にしがみついた。一分も経たず、雲は情報部の洞窟に着いた。神様は全速力で穴に駆け込んだ。

「ご覧の通りです」クロが言った。洞窟には、ミリアキヤット踊りの三匹以外の全兄弟が集まり、タブレットを十六面つなぎ合わせた大スクリーンで裏世界のアラファト山を見ていた。

火口から溶岩が吹き出ている。その上空では四角い風が、炎に煽られながら吊り下げた爆弾を落とそうとしている。

「なんて馬鹿なことするの」キジシロが呟いた。  
「馬鹿の集大成だね」クレバスが言う。

「上等だね。とんでもねえ間違ひ藁だ。もし間に合ってたらいザヤを殺しやあしなかったし荒野にも出かけてねえ。イエスの宗教なんぞこの世に生まれちゃいねえ。髑髏ヶ丘もなけりや昇天もねえ。今頃はアンナと十人もガキこさえてベツレヘムで子育てパパになつてらあね。そのほうが幸せだったんじゃないやねえかい？」

「あるいは、ね。今から言えばそうも言える。サルや、世の中では多くの動物や人間が間違ひた藁を引いてるんだ。それが間違ひかどうかはわからない。俺だつてわからないから止めようがないんだよ」

「神様でも未来は見えねえんですかい？」

「見えるわけないだろ。見えたならもう少し優秀な神様になつて」

ズルズルと小さな音を立てて白ヘビが入つて来て、「こんばんは。お久しぶりです」と言った。

「おや、珍しいね。創世記以来じゃないか。どこに隠れてたの？」神様は懐かしそうだ。

「はい、世界のあちこちに。あのリングゴの一件でマリアさんがメチャ怒つたんで身の危険を感じまして、辺境の地をさまよっていました。どこでも皆さ

次の瞬間、黄色く塗られた爆弾が火口目指して落下し、風は糸が切れたように急上昇した。

「ああ、やつちまった」ハナボチが言った。

数秒は何も起きなかった。洞窟のネコたちは体をカチカチに固まらせて、これから起きる何かに備えた。不意にモニターの画像が真っ白になり、そして消えた。

「偵察機からの信号レベルがゼロだ」とタイガ。

「それじゃ、青血族を見張つてる一台を、大至急現場に向かわせて」マリアが指示する。

別の画像がモニターに映った。遙か彼方から現場を見た様子だ。

「現場に行かせるまでもないみたい。千キロ以上離れていてもこの有様」

これほど巨大な炎の固まりは、有史以来一度もなかっただろう。炎なのか溶岩なのか定かではないが、どちらにしてもそれは膨張し続けていた。高速で四方に広がり、雲よりも高く立ち昇っていた。

ヨハネは泣き、うなだれてマリアの隣に来た。そして黙ってマリアの腹の下に潜り込んだ。「お前のせいじゃないよ」マリアはヨハネを舐めながら優し

く言った。

「この画はネットでも配信してる？」と神様が訊くと、「同じものをみんな見てます」とクロが答えた。不意に地面が持ち上がり、上がった三倍くらいの勢いで落ちた。続いて大きな横揺れがやってきた。「テロップを入れる。プランAはナシ、BかCに備えるようにって。音声でも呼びかけてくれ。『強風に注意。木の上の生き物は地上に降りて伏せろ』と裏世界の惨事はヨハネが書いた通りに進んだ。裏世界のアラファト山が引き金になって、火山が次々と誘爆した。カメラを通してでは見えないが大地震も連続しているようだ。バベルの塔が最初に倒れ、続いてすべての建物が崩れ始めた。真っ暗な中、動物と人間は逃げ惑っていることだろう。

最初の原発が火を吹いた。人工の火山のようだ。闇の中に炎を吹き上げ、闇より黒いガスを噴き出している。炎は地上を舐め、森、街、工場地帯を見境なく焼き払いつつある。

青血族の四軒の家から何かが舞い上がった。円盤に馬の首が付いた宇宙船のようだ。四隻の船は編隊を組むこともなく、それぞれ必死に上昇している。

かつてひざまずいた。

「アラファトよ、アラファトよ、あんたが怒ったら収まるものも収まらない。そりゃ、いろいろと腹の立つことばかりだが、今回だけは我慢しておくれ。俺、どんな神様にでも祈るから」

アラファト山の煙が消えた。

「プランCをどうやって発令するの？ 肝心なとうちゃんの外に出たきり帰ってこないし」キジシロの目は真っ黒だ。

「多分大丈夫だよ。まさかこんなときに山と世間話してるはずはない。それよりネットに流そう。『プランC、なるべく安全な場所で、手近なものにしがみつけ』ってね」クロはすぐさま全画面表示で情報を流した。

「アラファトさん、ありがとう。これでカナンは助かる。さあ次はテレパシーだ。おーい、聞こえるか？ プランCを実行するぞ」

「待ってました。ついに決断しましたね。さすがです、素晴らしー」

しかし火山と原発から燃え上がった炎に、次々と飲み込まれていった。

「神様、放射線レベルが急上昇中。新大陸の観測点では、現在二百ミリシーベルト。さらに線量上昇中」タイガが叫んだ。

「バミューダトライアングルから漏れてるのかな。他の観測点は？」

「パリでは二十ミリ。上昇中」と、クレバス。

「ローマとエルサレムは十五ミリ。これも上昇中」とツンドラ。

「わかった。プランCだ」神様は決断した。

「あのお、お取り込み中失礼します」ナマケモノが入って来た。「アラファト山がね、様子がヘンです。煙なんか出してますよ」

「煙どころじゃないだろ。大爆発だよ」クロがイラついて答える。

「ええと、それはあっちの世界でしょ。私の言ってるのは、こっちのアラファト山でしょ」

神様は洞窟から飛び出して山を見上げた。たしかに煙が上がっている。予想外だ。あの山が噴火したら、カナンごと逃げて意味がない。神様は山に向

「おい、嬉しそうだな。そんなにこの世の終わりが面白いのか」

「いや、面白いと言われれば、そうでもないです。好ましいかと言われると、あるいはそうかな、と」

「数千億の生き物が死ぬんだぞ」

「たしかに。でも、これで神様の肩の荷が下りるのも事実でしょ。鬼っ子でしたものの、地上の人間」

神様は、それが事実なのを認めるしかない。心の片隅でそう思ってもいたし。

「ゴチャゴチャ言うな。時間がないんだ。すぐにカナンを持ち上げる」

「カナンの地上だけでいいんでしょうか。地下は要りますか？」

「当然要るよ。モグラが困るだろ」

「どのくらい深くまで？」

そんなことを考えてなかった。適当に言っておこう。深いほうがいいや。

「五百メートル」

「なんで？ 石油でも掘るんですか」

「いいから、言った通りにしてくれ。俺は神様だ」

衝撃はほとんど無かった。カナンは音も無く浮か  
び上がり、最初はゆっくり、次第に速さを増して垂  
直に天を目指した。

著ネコ近影



原稿できた？ 当然まだですよ。

## 😊 ここまで読んで、感想と予想 😊

### 【隣のタロ君談】

えっ、こんなに長かったの？ 魔法瓶はネ  
コ車いっぱいあったからなあ。それはそうと、  
今度はタイガー魔法瓶が出たんだよ。

### 【長野の長老談】

そうじゃろうて。この世は一度壊滅してお  
るのだ。地獄の炎を生き延びたのはわしだけ  
だからして、歴史を後世に伝える義務がある。

### 【カッチャン談】

こうなるってえと、次はクーデターだな。  
サルのコ令官にやサル知恵しかねえから、カ  
ナン全部を仕切りたがるに違えねえ。だろ？

### 【ミッチャン談】

ばっかばかしい。もう読むのやめた。カナ  
ンが宇宙に逃げて、次はどうするのよ。火星  
に移住でもする？ タマ、早く書きなさい。

### 【薄ぐれのマサ談】

火事と喧嘩は好きだが、地震と熱風つてえの  
はねえ。仕方ねえからネコ専門の救助隊を作る  
ことにした。いつでもどこでも駆けつけるぜ。

### 【長野のシュレ談】

当該文書は論理的整合性に優れ学術的価値と  
しては類似文書を遥かに凌駕し最高水準の第一  
級資料であると一学究として再三確信します。

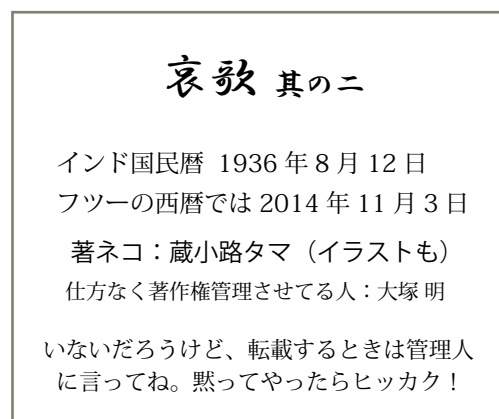
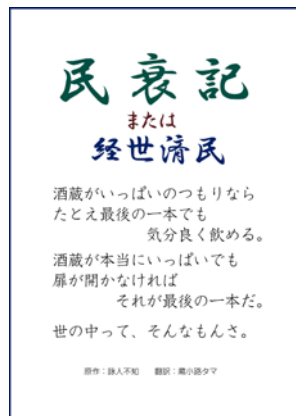
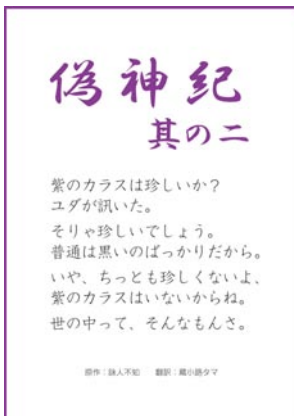
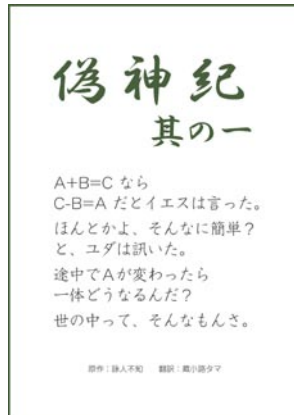
### 【タケチヨ談】

やっとながて出て来た。白黒のブチだつてね。  
これから大活躍するんだらう。タマ、そうだよ  
ね？ 出てきただけなら、また話があるからね。

### 【おかあさん談】

純愛に生きる苦しさと喜び。アンナと雲ザル  
のバルコニーの場はシェークスピアでも書けな  
いでしょう。時間って、ホントに残酷。





やっぱネコだ。危ないっ！ って思ったら、いきなり逃げる。とりあえず逃げる。神様もネコ型だから逃げ出したけど、胸中は複雑だったと思うよ。なんつっても無指向性の博愛主義者だからね。山麓のキリギリスを見捨てられないネコが、金魚鉢を壊す金魚を止められないなんて、悲劇そのもの。それにしてもヨハネは気の毒だったよね。とうちゃんを喜ばせようと、想像と妄想を精一杯膨らまして書いたストーリーが、そのまんま採用されちゃった。普通なら予言者って言われて、本でも書いたら売れるだろうな。大陸書房あたりから出せばフジテレビが飛び付く。

だけど、まんざら絵空事でもないような、って思うのはアタシだけ？ この地上には、お話の中の旧世界と同じくらい危険物がいっぱい。適正に管理すれば安全、ってことになってるんだ。つまり、人間は決して間違えなくなつたことで、ついに神と同じ能力を得たわけです。いつからよ？

そんな思いつきがあったアホが「人命は地球より重い」なんて言ったとしても、チャンチャラおかしいよね。カナンを生かすために、表と裏の旧世界を見捨てた神様の「しょうがないだろ？」のほうで説得力ある。これ、強者の理論じゃないよ。切羽詰った一言だと思っんだ。

次のお話の舞台は、疎開したカナンです。んじゃ、またね。

タマ